エステ家の誉、リナルドの段
―『解放されたエルサレム』第十七歌冒頭から第十八歌三十八節まで―

Rinaldo, l'onore della Casa d'Este
―La traduzione giapponese della *Gerusalemme liberata*, il Canto 17 (intero) e il Canto 18 (fino all'ottava 38)―

水野　留規
MIZUNO Ruki

Il Canto 17 comincia con la rassegna dell'esercito egiziano. Arriva Armida e promette sé stessa a chi ucciderà Rinaldo. Il re di Egitto affida ad Emireno il comando dell'esercito. Rinaldo insieme a Carlo e Ubaldo giunge in Palestina e riceve dal mago di Ascalona lo scudo in cui descritte le glorie dei suoi antenati. Carlo consegna a Rinaldo la spada di Sveno. Il mago esorta Rinaldo a compiere imprese virtuose. I guerrieri guidati dal mago si dirigono verso Gerusalemme. All'inizio del Canto 18 Goffredo perdona Rinaldo e gli commette di vincere la selva incantata. Rinaldo sale sul monte Oliveto per pregare e poi vince gli incanti della selva.

第十七歌（一）
エジプト軍の閲兵式

一　ガザの町はユダ地域の端に位置し、ペルーシオ（ペルーファメン）に向かう街道沿いの海浜にある、近くには寂寥たる砂漠が拡がり、その砂塵がつむじ風に巻き上げられるさまは、南風を受けた海面に波が立たつかのごとくである、揺れ動く砂の荒野で暴風に襲われた旅人は、身の安全を確保し、避難するために多大な苦労を強いられる。二　エジプト王は自国と境界を接するガザを、トルコ人からかなり前に奪い取っていた。戦いに介入しようとしていた王は、戦場に近く戦略上重要なガザの占拠を企てて、エジプト国内に建つ豪華な宮殿を離れて、この地に自らの王宮を移設し、諸地域から大勢の軍勢を呼び集めていた。三　さあ、詩の女神（ムーサ）よ、わたしに思い出させてください、〔イスラム軍の閲兵式が〕いつ、どのようにして執り行われたのかを。絶大なる力を持つエジプト王が、どういった装備の、どれほどの軍団を組織し、どんな人々を

臣下とし、また盟友とし、南の諸地域にいた兵士たちや東方の辺境にいた諸侯たちをいつ戦いへと向かわせたかを。あなただけが兵士たちや武将たち、そして武装して集まった大勢の人々について、わたしにいま教示することができるのです。**四**　エジプトがギリシャの帝国に反旗を翻してその支配から脱し、〔イスラム教に〕改宗した後、マホメットの血を引く一人の戦士(二)が権力を握り、エジプトに王朝を開いた。この男はカリフと呼ばれ、最初のカリフから王笏を受け継いだ以後の王たちにもカリフの称号が与えられた。ナイルの地ではファラオ、そして後の時代にはプトレマイオスという名を、歴代の王たちが綿々と継承するということがあった。**五**　年月の経過とともに、王国は確固たる基盤を確立し、版図を拡大した。アジアとリービアに進出して、マルマリカ地方との境界およびチレーネ(キレネイカ)地方からシリアの海岸に達するまでの一帯を支配下に置くと、謎の場所から発しているナイル川を遡ってシエーネ(アッスアン)の町よりさらに奥地へと入り、そこから一方では人が住んでいない砂漠地帯へ、他方では大いなるユーフラテス川が流れる地域へと向かうに至った。**六**　豊かな海と、その左右に見いだされる芳しい浜辺を自国領に組み入れ、エリュトラー海〔紅海〕をはるかに越えて、朝の太陽が昇る地域に向かって王国は伸びゆく。強大な軍隊を擁し、いま君臨している王(三)の尽力によって軍の力はさらに増し、その名声は高まっているのだが、それは王が高貴な生まれであるということよりも、むしろ統治や戦術に長けていることに起因する。**七**　王はトルコやペルシャの民とたびたび戦火を交え、王のほうから戦争を仕掛けたこともあれば、来襲した敵を撃破したこともあった。ときには勝ち、ときには敗れたが、勝ったときよりも逆境に置かれたときのほうが王の力は発揮された。齢を重ねて武器の重みに耐えられなくなってようやく剣を置いた。しかし生来の闘争心や、名誉と王国に対する飽くなき執着を王が棄てることはなかった。**八**　臣下たちの助力を得て戦いを続け、精神にも言葉にも気力を漲らせているので、高齢にも拘わらず、国家の統治を過剰な負担とは感じていないようなのだ。小さな国々に分割されたアフリカは、王の名前を聞いただけで恐れおののき、遠方のインドにいる人々も王を崇め、或る部族は軍団を王のもとに自発的に派遣し、或る部族は金塊を届ける。**九**　このように威勢を誇る王は軍勢を集結させようとする、否すでに集結させているのであり、フランク人の武運と武力に対抗するべく出撃させる、勝利を重ねるフランク人はいまや王にとって警戒すべき存在となっている。軍にはアルミーダが最後に加わるだろう、かのじょは閲兵式に時宜を得て参列しようとしている。隊列を組んだ軍勢が、城壁の外にある広い野原で、王のほうに向かって行進を始める。**十**　百段から成る象牙の階段を昇った先に王座が据えられ、そこに王が厳めしく座っている。大きな銀色の天蓋の下で、王はその影に入って、黄金色の糸で編まれた深紅の絨毯(じゅうたん)に両足を置いている、異国の装飾具が付いた立派な服を身につけて、その姿は輝いているようである。頭部には白い麻の帯が何重にも巻き付けられ、丈の高い異様な王冠を形作っている。**十一**　右手には王笏を握り、白い髭を生やした王は、威厳に満ちた厳格な人物のように見える。老いを感じさせない目元には情熱と若々しい精気が漂い、ひとつひとつの動作が経験と権力に支えられた威厳で満ちている。その表情はアペッレース(四)が描いた、あるいはペイディアース(五)が彫ったゼウス像に似ている、かれらが表現したゼウスは怒り

で燃えているのではあるが。**十二**　王の両側には、それぞれ一人ずつ身分の高い武官が立っている。最も高貴な地位にある武官は正義を示す剣の刃を高くかざし、もう一人の者は自らの役職を象徴する印章を手にしている。後者の男が国家の機密を守り、王のために国の内政に関係する実務を統括しているのに対して、前者の男は軍の大将であり、絶大な権限を持って罪人を処罰する。**十三**　王座の下では王座を囲むように、槍を手にしたコーカサスの男たちが警備にあたっている、鎧に身を包んで、槍のほかに湾曲した長い新月刀を片方の腰に下げている。暴君の男はこのような場に設置された席について、高いところから結集した軍勢を隈なく見ていた。兵士たちは王座の下を通過する際に、王に敬意を表するために、皆が武器と軍旗を下げる。**十四**　エジプトの兵士たちが先頭を切って閲兵する、軍団を率いるのは四人の武将で、二人は高原地帯の出身だが、あとの二人は神々しきナイル河の産物であり賜物である低地の地域から来ている。滋養に富んだ泥は海を河口から遠ざけ、水分を排出して固まり、耕作に適した土となった。こうしてエジプトは発展したのだが、かつて船乗りたちが船を寄せていた場所は、いまや海から何と離れたところにあることか！**十五**　最初に来る軍団の兵士たちはアレクサンドリアの肥沃な平野に居住していた者たちで、かれらの住処があり、西に向かって開かれたその海岸はすでにアフリカの海岸である。軍団を率いるのはアラスペで、この男は武勇よりも知恵で名を馳せている。罠を仕掛けることに長け、ムーア人たちが戦闘で用いる戦術はかれのお手の物である。**十六**　二番目に登場する連中はアジアの東の端に位置する海辺にいた兵士たちであるが、隊長のアロンテーオを高名にしているのは武勲や資質ではなく、数々の称号である。この軟弱な男は兜を付けて奮闘したことがなく、軍の喇叭の音を聞いて奮い立った経験もない、武人として不適格であるにもかかわらず、安楽と木陰から離れて過酷な戦場に身を投じている。**十七**　三番目に来るのは師団ではなく、大きな軍隊のようであり、野原と海辺を兵士たちが埋め尽くしている。これほど多数の軍勢を養うためにエジプトで種蒔きや耕作が行われているとは驚きであり、しかもこの兵士たちは一つの都市から来ている。その都市は地方に匹敵するほど大きく、諸地方と競うほど強大で、千の異なった民族を抱えている。それはカイロであるが、隊長のカンプソーネはこの都市から、戦うことを好まない大勢の人々を連れてきている。**十八**　ガゼルの指揮の下にやってくる部隊は〔カイロの〕周辺の肥沃な平野とその少し上の一帯、すなわちナイル川の二番目の瀑布に至るまでの地域で穀物を刈り入れていた。エジプトの兵士たちは弓と剣しか所持せず、兜や鎧の重みに耐えるような連中ではない。かれらが着ている服は豪奢であり、かれらと戦う者たちはそれを奪おうとして、そのためならば命をも賭する。**十九**　続いて来るのはバルカ地方の人たちで、アラルコンに率いられて進んでいる、裸同然で、ほとんど武装していない、かれらは不毛の平原で略奪することで飢えを古来克服してきた。かれらほど罪深くはないが、会戦には不向きな兵士たちを引き連れて、ズマーラの王が続く。それからトリポリの王が来る。いずれの王の軍勢も戦いでは襲撃と撤退を巧みに、且つ素早く繰り返す。**二十**　かれらの後からはアラビア・ペトレアとアラビア・フェリクスで暮らす者たちがやってきた、後者の地域から来た連中は、噂が真実ならば、厳しい寒さにも酷暑にも屈しない。そこでは馥郁（ふくいく）たる香を放つ草花が芽を吹き、

不死なる不死鳥（フェニックス）（六）が生まれる、この鳥は死と生をつなぐために芳しい巣を作り、それは墓であると同時に揺りかごとなる。**二十一**　この連中が付けている武具はさほど華やかではないが、かれらの武器はエジプト兵たちがもっているものと似ている。見よ、先に挙げた二地域の種族とは別のアラビア人たちが後方にいる、かれらは特定の場所に定住しない人々だ。寝具や家財道具を携えて、つねに各地を放浪している。声や背丈は女性のようで、黒い髪を長く伸ばし、黒っぽく哀れな顔をしている。**二十二**　先端に鉄が付いた太い竹の筒で武装し、駿馬に跨がって駆けるときのかれらはつむじ風に運ばれているようである、かくも激しい渦を旋風が伴うことがあるのなら。最初の集団〔アラビア・ペトレアの軍勢〕はシファーチェに導かれ、二番目の集団〔アラビア・フェリックスの軍勢〕はアラディーノが率いる、三番目の軍勢の頭目をつとめるアルビアザールは人殺しを働く凶暴な盗人で、騎士ではない。**二十三**　次に来る集団はアラビアの海に囲まれた島々からやってきた者たちで、その海で漁をしながら真珠の詰まった大きな貝を採集していた。かれらと一緒にいる黒人たちはエリトリアの海〔紅海〕の左側の岸辺に住んでいた。最初の者たちはアグリカルテに率いられ、後の者たちはあらゆる信仰や掟を蔑視するオスミーダの統率下にある。**二十四**　メロエのエティオピア人たちが後ろから来る。メロエ地方は一面をナイル河と、別の面をアストラボーラ（アストバラ）河と接して孤島と化しているが、その広い域内には三つの国があり、異なった二つの宗教の民が住んでいる。これらの兵士たちを導くのはカナーリオとアッシミーロで、二人ともマホメットの教えに従い、カリフ〔エジプト王〕に貢いでいる。三つ目の国ではイスラム教が奉じられず、同国の民はこの地にやって来なかった。**二十五**　そしてエジプト王にやはり従属している二人の君主が、弓と矢で武装した軍人たちとともに進んでくる。一人はペルシャの大きな湾に浮かぶ誇り高く美しいホルムズ島の支配者である。もう一人はボエカンの統治者である。海中のボエカンは湾が満潮のときやはり島となるが、潮が引いて海面が下がっているとき、足を濡らさずして旅人は同地に到達できる。**二十六**　アルタモーロよ（七）、おまえが愛する妻は夫婦の臥所におまえを引き留めることができなかった。宿命づけられたおまえの出兵を阻もうと、泣き崩れ、金髪の髪をかき乱し、胸を叩いた。「では残酷な方よ」、かのじょは言った、「あなたはわたしの顔よりも、海の恐ろしい顔のほうに魅力を感じるのですか？　無邪気に戯れる幼い息子の体重よりも、武器の重みのほうが、支え甲斐があるのですか？　」**二十七**　この男はサマルカンドの君主である。自分が誰にも従属しないで町を支配していることをまったく誇らないが、武芸に長じ、勇猛果敢な豪傑であればこそ、それはできることである。フランク軍の面々はこの男の凄さを思い知らされるだろう（ここで予言しておこう）、この男は今の時点から警戒されるべきなのだ。この男が率いる兵士たちは鎧を着込んで、剣を腰に下げ、かれらの馬の鞍には蹄鉄が付いている。**二十八**　見よ、朝の太陽が昇ってくる極東の国からやってきた強者のアドラストを、黒い縞目が入った緑の蛇の皮で作られた鎧を着けて、巨大な象の背に馬に跨がるように乗っている。かれが連れている人々は、インダス川が注ぎ込む湾で身を清め、ガンジス川よりもこちら側で暮らしている。**二十九**　次に来るのはエジプト王の軍の中でも選び抜かれた精鋭たちで、かれらは皆が王国から報酬を受け、相応の栄誉を与えら

れ、戦時にあっても平時にあっても兵役につき、国防と威嚇のために武装し、立派な軍馬に跨がって整然と進んでいる。深紅の外衣や、武具の鉄と金の部分から放たれた輝きが空に反射している。**三十**　かれらの中には残忍なアラルコ、召集隊長のオデマーロ、イドラオルテ、敵や死を侮辱する勇将として知られたリメドンがいる。ティグラーネとラポルドは海を荒らし回った名高き海賊であった。オルモンドは強者と呼ばれ、マルラブストはアラビア人という異名を持つが、その名はかれが反乱を平定したアラビアの諸地方から与えられた。**三十一**　この軍勢の中にはオリンド、アリモン、ピルガ、諸都市で略奪を働いたブリマルテ、馬の調教師のシファンテらもいる。そして格闘技の達人アリダマンテよ、そなたもいる。軍神が放つ電光のごときティサフェルノよ、そなたと勝負して勝ると思っている者はいない、騎馬戦でも地上戦でも、剣を振り回しても槍で立ち向かっても。**三十二**　だが、この連中を導いているのはアルメニア人の王子であり、かれは若いときに真実の信仰を棄てて異教徒となり、名前もかつてはクレメンテであったが、いまはエミレーノ（八）と称している。しかしながらエジプト王に仕えた者たちの中で、かれほど王の信頼と寵愛を得ている者はいない。かれは隊長であると同時に、勇猛さにおいても、英知においても、武芸においても、卓越した騎士なのである。

アルミーダの登場

三十三　もはや〔閲兵を終えていない者が〕誰もいなくなった時、突如としてアルミーダが現れ、みずからの従者たちを行進させる。ガウンを足下からまくり上げ、射手の装いで、大きな山車（だし）の上部に腰掛けて進んでくる。その美しい顔には先頃の怒りが生来の可憐な表情と混ざり合って表れ、生気を感じさせるが、かすかな苛立ちを含んだ厳しい態度で、周囲の者たちを威嚇し、威嚇しつつも喜ばせているように見える。**三十四**　山車は日の光をもたらす〔太陽神の〕戦車のごとくで、その輝きは石榴石（ざくろ）やジルコンの赤い光沢を思わせる。対を成して繋がれた四頭の一角獣に牽かれ、賢き御者がその飾られた轭（くびき）を操る。背中に箙（えびら）だけを付けた百人の娘たちと百人の小姓たちが山車の横を進み、かれらが跨がっている白い駿馬は素早く回転し、軽やかに駆ける。**三十五**　後ろからやってくるのはアルミーダの軍団で、アラディーノに率いられた兵士たちは、イドラオーテ（九）によってシリアで雇い入れられた。稀なる不死鳥（フェニックス）が再生してエティオピアに向かって飛び立つとき、多色の麗しい羽根や頸（うなじ）の豊かで優美な羽毛や生来の黄金の冠が世の人々を驚かし、その両横や後ろでは鳥の軍団が自らも驚きつつ飛ぶように、**三十六**　かの女はその驚くべき衣装や仕草や表情に接する者たちの視線を浴びて進む。かのじょの姿を目にして恋心を抱かない者は、魂がよほど無感覚か、あるいは頑なに抵抗を試みているかのどちらかである。一瞬だけでも、その怒りを含んだけわしい顔を見るならば、どんな男でも魅了され、大勢の者たちが虜にされてしまう。優しい表情をしたかのじょが、笑みを振りまいて、美しい視線を男たちに向けるならば、どんなことが起きるだろうか？　**三十七**　だが、かのじょが通り過ぎた後、王たちの中の王〔カリフ〕はエミレーノを自らのもとに呼び寄せて、他の臣下たちよりも高く評価するこの男を全軍の司令官に指名する。それを予想していたエミレーノは、司令官の地位が自らに相応しいと言わんばかりの表情で進み出る。コー

カサス人の警備兵たちはかれを通すために二手に分かれ、かれは階段を上っていく。**三十八**　そして頭を下げて、膝をつき、右手を胸にあてる。王がかれに言う。「この笏を握るのだ。余はそなたに、エミレーノよ、兵士たちの指揮を命じる。余に代わってかれらに命令を下し、余の臣下であるエルサレム王を救出して、フランク軍に対する余の復讐を果たすのだ。行って、観察して、勝つのだ。敗走する敵兵を逃すな、死んでいない者は捕虜とせよ。」**三十九**　このように暴君の男が言うと、騎士は軍の統帥権を示す笏を受け取った。「笏を拝受します、閣下、すべてに勝るあなたのお手から」と言った、「あなたの期待を背負い、崇高なる戦いに向かいます、あなたの意を受けて、軍の司令官となり、アジアが被った重大な侵害に報復するべく。勝利者とならなければ戻って参りません、敗北したならば不名誉ではなく、死を与えてください。**四十**　天に向かってわたしは切に祈願します、もし天上で（そのようなことがあるとは信じませんが）敗北がすでに定められているならば、逃れることのできない突風をすべてわたしの頭の上に吹きつけ給えと。兵士たちが無事に帰還し、隊長〔であるわたし〕の遺体は荘重な葬式ではなく凱旋の行列に担がれますように。」かれが話し終えると、兵士たちは賛同の意を表わし、粗野な楽器が大きな音を発した。**四十一**　叫びや楽器の音が響く中、大勢の高官たちに囲まれて王たちの中の王がその場から立ち去る。大きな天幕のところに着くと、整えられた食卓に武将たちをつかせ、自分は他の者たちから離れたところに座る、料理を持ってこさせたり、同席する者たちと会話をしたりして、宴のあらゆる部分に気を配る。皆が愉快に歓談しているのを見て、アルミーダは策略を敢行する機が熟したと思う。**四十二**　だが、料理が片付けられたとき、皆の視線がおのれに集中し、各人の心におのれの毒が浸透していることを――それを示す確かな印のうちに――見て取ると、立ち上がって、席から離れずに王のほうを向いて、恭しく振る舞いつつも堂々とした態度で、できるだけ威厳のある勇ましい表情と声で話し始める。**四十三**　「おお、気高き王よ、わたしもまた参りました、信仰と祖国のための戦いに加わるために。わたしは女ですが、王家の女です。女王であるがゆえに従軍が許されないとは思いません。王国を擁護しようとする者は王国のあらゆる腕利きを利用し、同じ手に笏と武器を握るべきです。わたしの手は（剣が扱えないほど無力でも、不器用でもないので）敵を傷つけ、傷口から出血させることだってできるでしょう。**四十四**　立派な手柄を立てたいという望みを、わたしは今日初めて抱いたわけではないのです、われらの掟と王国を護るために、わたしはずっと前から戦いに従事して参りました。それが本当かどうかお知りになりたければ思い出していただきたいのです、わたしの戦績は幾分なりとも把握されているはずで、十字架を掲げる軍の英雄たちの多くをわたしが捕虜にしたこと（十）もご存じでしょう。**四十五**　わたしは捕え、縛り上げた敵兵たちを、価値ある贈り物としてあなたのもとに送りました。かれらは今でもあなたの指図によって暗い監獄の中に閉じ込められ、あなたは戦で勝利を重ねて、今頃は大戦を着実に終結へと導いていたことでしょう、もし勇猛なリナルドがわたしの兵隊たちを殺して、捕虜たちを解放する（十一）ことがなかったならば。**四十六**　リナルドという人物はよく知られ、かれの武勇はこの地でも語られています。この無慈悲な男にわたしはひどい仕打ちを受けましたが、それに対する復讐を遂げてい

ません。ですから怒りが〔復讐の〕正当な理由に拍車を掛け、わたしを復讐へといっそう駆り立てるのです。しかし、わたしの受けた侮辱がどんなものであるにせよ、それはいずれあなた方に語られることでしょう。いま申し上げられることはそれだけです。わたしは報復に出ます。**四十七**　わたしは復讐を果たすでしょう、なぜなら風があらゆる矢を無駄に運ぶことはないからで、天の右手は正しい手から放たれた矢を悪しき者たちに命中せしめ給うからです。しかし、誰かが非情な野蛮人の憎き頭を切断して、それをわたしに届けるならば、それも――わたしの手で復讐を成し遂げるほうがはるかに望ましいのですが――わたしにとっては喜ばしい復讐です。**四十八**　わたしはまさにその歓喜のゆえに、当の者に対して、自分にできる限りの褒美を与えます。その者がわたしを褒美の品として求めるならば、わたしはその者の妻となり、わたし自身と持参金を与えましょう。このことをわたしはここで固く約束し、不可侵の誓いとして誓約します。さあ。この褒美が身の危険の代償として十分だと思う方は、声を上げて進み出てください。」**四十九**　女がこのように話している間、アドラストは物欲しげな眼をかのじょに向ける。「天よ、禁じ給え」と言って続ける、「万が一にもあなたが野蛮な殺人者に向けて矢を放つことを、粗野な心は、おお美しき射手よ、あなたの矢が射貫くには値しないからです。わたしこそはあなたの復讐を引き受けるに相応しい者で、奴の頭をわたしはあなたに献上しましょう。**五十**　わたしが奴の心臓をえぐり出して、引き裂かれた手足を禿鷹の餌としましょう。」インド人のアドラストがこのように言うと、その誇らしげな態度にティサフェルノは我慢がならず、「自分が誰だと思っているのか？　」と言った、「王やわれわれの前でかくも高慢に振る舞う貴様は。ここには貴様の横柄な態度を行動でもって凌ぎ、沈黙を保っている者がいるかもしれないというのに。」**五十一**　インド人の男は答えた、「わしは行動力がある反面、口下手で話し下手だ。だが、おまえが他の場所で生意気な言葉を吐いていたならば、その言葉がおまえの最後の言葉になっていた。」両者の争いは続きそうであったが、王が手で合図して両者を制止させた。王はそれからアルミーダに向かって言った。「高貴な淑女よ、あなたは誠に気高い心を持ち、男勝りであられる。**五十二**　これら二人がそろって闘志と怒りを捧げるに値する御方です、後にあなたはそれらを意のままに、かの強く邪な盗人に向けることができます。その時に、それらはより適切に発揮されるでしょう、そなたら二人も、その際に互いに張り合って、皆が見ている前で燃え立てばよいのです。」そう言うと黙った。二人の戦士はかのじょに改めて提案をし、互いに競い合ってかのじょの仇を討つこととした。**五十三**　これら二人だけではなく、戦で名を上げた者たちは誰もが自らの力量を迅速に、且つ大胆に主張する。皆がかのじょに仕えることを欲し、呪わしい男〔リナルド〕を断罪することでかのじょの恨みを晴らそうとしたのに対し、かのじょはあれほど大切にしていたその戦士を懲らしめるために、今や多くの者を激昂させ、闘いへと駆り立てる。しかし、当の戦士はかの海岸（十二）を離れた後、順調に長い船旅を続けていた。

老魔術師と出会うリナルド

五十四　舵手の女（十三）は往路と同じ航路を往路とは反対向きに進む。帆を膨らませて舟を飛ぶように速く進ませた風は、帰路においても往

路に劣らぬ勢いで帆に吹きつける。若者は時には北極星や熊座の星々を見て、時には暗黒の夜の旅路の役割を果たす輝く星々を、また時には河川や高い頂を海面上に突き立てる山々を観察する。**五十五**　時にはキリスト教軍の現状について、時には異国の人々の風習について、舟に同乗する者たちに尋ねて把握しようとする。一行はその間に海の波間を進み、東から四度目の太陽の光が射し込む。その太陽が沈もうとする頃になって、舟はようやく陸地に近づく。すると婦人は言った、「パレスティナの岸辺に着きました。旅はここで終わりです。」**五十六**　それから三人の騎士たち（十四）を岸辺に降ろし、ひとつの言葉を発するよりも速く立ち去った。やがて夜の帳が降りて、さまざまな物体の像が唯一の像となって混じり合っていった。荒涼とした砂浜いる三人は目にしている物体が壁なのか屋根なのか判じられない、残された足跡を辿って先へ進もうとするが、それが人のものなのか馬のものなのか、それ以外のものが残したものなのかも分からない。**五十七**　しばし動きがとれずにいたが、海を背にして歩み始めた。そのときかれらの眼は光るものを遠くの方に認める、それは銀色の光と金色の輝きで暗闇を照らし、きわめて薄い影を投げかけている。かれらはその光のほうに進んでいき、光を放っているものが何なのか解するにいたる。**五十八**　かれらが見たのは製造されたばかりの武具（十五）で、太い木の幹に掛けられて月の光を受けているが、兜や甲冑に嵌めこまれた宝石は空の星々よりも燦然と輝いている。大きな盾の表面には、見事な一連の彫像が光を浴びて浮かび上がっている。側には一人の老人（十六）が番人のごとく座り、その老人は三人を見ると、すぐにかれらに近づく。**五十九**　二人の戦士は老人の威厳に満ちた顔を見て、老人が親しき賢者であることを見て取る。だが、老人は歓喜する二人から挨拶を受け、それに丁重に応えると、無言で自分を見つめていた若者のほうを向き、言葉をかけた。「君子よ、あなただけを」、老人は若者に言った、「わたしはここで、こんな時間に、一人きりで待っていました、**六十**　そのわけは、あなたはそれをご存じないでしょうが、わたしがあなたの友だからです。あなたのことをどれほど案じていたか、こちらの二人に尋ねてください、かれらはわたしに導かれて魔法を解いた（十七）のです、あなたが忌まわしい時間を過ごしていた場所で。さあ、わたしの話を聞いてください、それはセイレーンたちの歌（十八）とは正反対の価値をもっていますので、煩わしい話と思わないでください、でも心にそれを留めておかないといけないのは、もっと賢く、もっと神聖なる舌（十九）が真実を一つ一つ説明する、そのときまでです。**六十一**　君子よ、われわれにとっての善は、泉が湧き、花が咲き乱れ、ニンフたちやセイレーンたちがいる木蔭の爽やかな平地ではなく、嶮しく登攀が困難な美徳の山の頂上に置かれているのです。寒さに耐えないで、汗をかかないで、快楽の道に陥らないようにしない人は、善の境地に達することができません。あなたは高山の頂のはるか下で横たわるのですか、空高く飛ぶことを宿命づけられた鳥が谷間を舞うように？　**六十二**　自然はあなたに天を見据えさせ、寛大で気高い精神を付与しました、あなたが高みを目指し、輝かしい偉業を達成することで最高の栄誉を獲得するように。瞬時に激する闘志も与えましたが、それは内輪もめに際して発揮するためでも、理性を欠いた貪欲な願いを叶えるためでもありません（二十）、**六十三**　激情で武装することであなたがより勇猛に外敵に立ち向かい、貪欲という内に潜む邪悪な敵

をより大きな力で押さえ込むためなのです。そして賢き司令官は闘志をその本来の目的のために活用し、調整するのであり、自らの判断で滾（たぎらし）らしたり、冷ましたり、かき立てたり、抑えたりしなければならないのです。」

盾に示されたエステ家の栄光

六十四　老人はこのように話した。もう一人の男は老人の知性溢れる言葉を注意深く、黙って聞き、記憶に留めようとしたが、従順な態度で、恥じ入るように視線を地に向けていた。年老いた魔術師は男の秘められた胸中を透視し、かれに向かってさらに言った。「顔を上げなさい、おお息子よ、今こそはこの盾（二十一）をしかと見るのです、あなたの先祖たちの事績がそこに刻まれているのが分かるでしょう。**六十五**　父祖たちの栄光は、あなたが見るように、遠い過去に辺境の苛烈な土地に発して、世に知られるようになりました。栄誉を競うこの高貴な競走において、足の遅い走者よ、あなたはまだ後方を走っています。さあ、さあ、自らを奮い立たせるのです。武勲を立てるために、わたしが盾の中に指し示すものを鞭とし、拍車とするのです。」このように老魔術師は述べた。騎士は老魔術師の言葉に応じて、そこに注目した。**六十六**　秀でた彫金師が洗練された技巧を駆使して、小さな空間の中に無数の絵柄を彫り込んだ。アッツィオ（二十二）の血を引く輝かしく高貴な先祖たちの系譜が、そこでは途切れることなく示されていた。古のローマの汚れも混じりけもない泉から、一族の脈流が発していることが解された。月桂樹の冠を付けた王子たちがいて、かれらにまつわる戦や武勇について老魔術師は語る。**六十七**　かれが指し示すカーイオ（二十三）は、国力が傾いていた帝国が蛮族（二十四）に初めて屈した時、自らのもとに身を寄せた人々を指揮してエステの町の最初の当主となり、統率者を必要としていた近隣の郷士たちを受け入れている。その後、ゴート族の凶暴な男がオノーリオ（二十五）の求めに応じて再び名高き山道を通り、**六十八**　蛮族の放った火によってイタリア全土が焦土と化し、囚われの奴となったローマの礎からの破壊が恐れられた時、アウレーリオ（二十六）は集まってきた人々を保護して、かれらの自由を守った。次に老魔術師が指さしたフォレスト（二十七）は、北方を支配していたフン族の男（二十八）に対抗している。**六十九**　残忍なるそのアッティラが顔つきから確認できる、かれは龍のような眼で睨んでいるようで、犬のごとき表情をしている、その姿を見る者はかれが吠えていて、唸り声が聞こえてくるようだと言うだろう。そして決闘で敗れた凶暴な男は武装した男たちによって保護され、アクイレイアの防衛はイタリアのヘクトール（二十九）である善きフォレストに委ねられている。**七十**　他の部分ではフォレストの死が表現され、かれの運命は祖国の運命と重ねられている。見よ、偉大なる父を継ぎ、自らも偉大なる息子アカリーノ（三十）の姿を、かれはイタリアの名誉を担う英雄だ。アルティーノの町をフン族にではなく、運命に対して譲歩し、自らはより安全な場所にのちに移動した。そして村々に散らばっていた千の家々をポー川流域に位置する一つの町（三十一）に集めた。**七十一**　氾濫すると波立つ大河に対しては堤防を築き、その一帯から、後の時代に偉大なエステ家の本拠地となる都市が形成されてきた。かれはアラン族を撃破しているようだが、オドアケルとの戦い（三十二）では邪悪な運命に憑かれ、イタリアのために戦って死

んでいる。気高き死は、嗚呼、かれを父親が受けたのと同じ名誉に与らせた。**七十二**　かれといっしょにアルフォリジオが倒れ込んでいる、追放されて町を出るアッツォの姿があり、かれの兄弟が同行している、かれらはヘルール族の暴君〔オドアケル〕の死後に戻ってきて武器と権力を奪回した。その横にいて、右目を矢で打ち抜かれているのはエステ家のエパメイノンダース（三十三）だ。かれは満足して息を引き取ろうとしているようだ、残忍なトーティラが打倒され、自分の大切な盾が無事だったので。**七十三**　わたしはボニファチョのことを話しているのだ。ヴァレリアーノは少年ながらも父親の足跡を追っている。すでに武人として一人前で、精神においても大人だったが、ゴート族の大軍に対抗することはできなかった。あまり離れていないところに勇猛な姿で表現されているのはエルネストで、スラブ人を相手に果敢に戦っている。その前面にいるアルドアルドはモンセリチェの町からロンゴバルド族の王を駆逐した男だ。**七十四**　エンリーコとベレンガーリオもそこにはいる。カルロ大帝（三十四）が帝国の旗を掲げた戦いで、後者の男は先頭に立って奮戦し、輝かしき企てを推進し、統率しているようだ。その後ルドヴィーコに仕え、そのかれの命令でイタリアを支配する大帝の従兄弟に対抗している。見よ、戦でベレンガーリオは勝利し、大帝の従兄弟を捕えている。その場面にはオットーネも五人の息子たちとともに刻まれている。**七十五**　アルメリーコもそこにいた。かれはポー川の婦人と呼ばれた町（三十五）の侯爵にすでに選出されている。深い信心をもって天を見つめ、瞑想者のような態度をとっているが、かれはさまざまな教会の建設者なのだ。かれと向かい合っているのはアッツォ二世で、この男はベレンガーリオと激しく戦っている。一進一退の状態が続いた後、かれのほうが勝利を収め、イタリアに覇権を唱えた。**七十六**　見よ、その息子のアルベルトがゲルマン人の国へ向かっている、かれは同地でよく知られた勲をたてたので、デンマーク人を戦争で破り、騎馬戦でも打ち負かしたとき、オットーネは娘に莫大な持参金を持たせて、かれを娘の婿とした。かれの後ろにはウゴーネがいる、ローマ人の勢いを止めることのできる豪傑で、やがてイタリア候と呼ばれることになり、トスカーナ全体がその勢力に屈することとなるだろう。**七十七**　テバルドと、妻のベアトリーチェに付き添われたボニファチョも描かれている。かくも高貴な父親の跡を継ぎ、莫大な財を引き継ぐ者の中に男は見当たらなかった。後を継いだのはマテルダ（マティルデ）（三十六）で、かのじょは数と性における欠点（三十七）を十分に補っているように思われる、賢く、能力のある婦人はスカートを王冠や笏に勝るものにすることができるのだ。**七十八**　かのじょは高貴な表情の中に男性的な雰囲気を漂わせ、その視線には男性的という言葉では表現されえないほどの力強さが感じられる。あちらの部分ではノルマン人を追撃するかのじょが表現され、これまで無敵であったグイスカルドが敗走に転じ、遠ざかりつつある。こちらにいるかのじょはエンリーコ四世（三十八）を打ち破り、奪った皇帝の幟を教会に寄進している。ヴァチカンにあるピエートロの大いなる玉座には、かのじょの計らいで、教皇が再び座ろうとしている。**七十九**　次に見るがよい、忠誠と敬愛を誓うかのようにアッツォ五世がかのじょの傍らに立ち、従おうとしているのを。だが、多くの高貴な子孫を産みだして、一族の中でも繁栄した支流となったのは、アッツォ四世の家系であった。クニゴンダとの間に生まれた息子のグエルフォ（三十九）は、おそら

くドイツからの求めに応じて同地に向かった。そして幸運にも恵まれて、ローマの善き種をバイエルンの地で芽吹かせた。**八十**　かの地でグエルフォは、後継ぎのないグエルフォンの大樹にエステ家の大きな枝を接ぎ木したようで、分かるだろう、その大きな枝がグエルフォの一門の人々を介して金の笏と冠を甦らせ、かつてなかったほど喜ばしきものにしているのが、美しき星々の恩寵を得てそれはますます伸びゆき、その勢いを止めるものはない。すでに天に届くほどまで生育し、大国ドイツの半分をすでに影響下に置き、全体に影を投げかけている。**八十一**　しかし堂々たる大木はイタリアに伸びた枝でも、ドイツに伸びた枝に劣らぬほど見事に花を咲かせた。グエルフォと向かい合っているのはベルトルド（四十）であり、そこには先祖たちを称えるアッツォ六世もいる。見る者に語りかける盾にはこうした人士が生き生きと表現され、かれらは動いているかのようだ。それらを見つめているリナルドは、もとより宿している闘争心に加えて、栄誉に対する願望が湧き上がってくるのを感じる、**八十二**　勇ましいかれの心は栄光を〔先祖たちと〕競いたいという気持ちに動かされ、燃え上がる、そうした想いに心を奪われたので、思考の中の情景――すなわち聖都が攻略され、陥落し、人々が殺される情景――が実際に起こり、その状況を目の当たりにしているように錯覚してしまう。かれは急いで武具を身につけるが、期待でもって勝利をすでに敵からかすめ取り、先取りしてしまう。**八十三**　しかし、デンマーク王の後継者（四十一）の死をリナルドにすでに語っていたカルロが、リナルドが受けるべき剣（四十二）をかれに手渡した。「これを受け取るのだ」、かれは言った、「剣に栄光あれ、もっぱら信仰のためにこの剣を揮（ふる）うのだ、強いだけではなく、正しく、敬虔な者であるならば。最初にこの剣を所有した方の仇を取るのだ、あなたを敬愛した方であるが故、その役目はあなたが負わなければならない。」**八十四**　リナルドは戦士に答えた、「天が叶えますように、この剣をいま握った手が剣の主である方の復讐をこの剣でもって為すことを。この剣のために支払うべきものをこの剣によって支払うことを。」カルロは笑みを浮かべてかれのほうを向き、長い感謝の弁を短い言葉のうちに込めた。だが、魔術師がかれらに歩み寄った、高貴な賢者は夜明け前に出発するようかれらを急かした。**八十五**　「いまや時となりました」、かれは言った、「ゴッフレードと全軍が待っている地へと向かうべき時に、あなたの到着はまさに時宜にかなっています。さあ、行きましょう、わたしは暗い大気の中を通って、あなたがたをキリスト教軍の宿営地に必ずやお連れします。」このようにかれは言い、馬車に乗り、すぐにかれらを招き入れる。手綱を緩めて、馬を鞭打って、東の方向へ駆けさせる。

エステ家の未来についての予言

八十六　一行が闇の中を進んでいたとき、老人が若者のほうを向いて言う。「あなたはご自身の、由緒ある一族の系譜と古の高貴な根を見ました。一族は初期の頃から優れた人物を輩出する多産で幸多き母胎でありましたが、出産はこれからも滞ることがないでしょう、老婆となっても活力を失う一族ではないのですから。**八十七**　太古の闇に包まれた懐から忘れられた祖父たちを引き出したように、これからの時代を生きるあなたの子孫たちに十分な光を当て、かれらのことを――かれらが優しく静謐な光を浴びて生まれる前に――世に知

らしめることがわたしに許されますように！そうすれば過去の名士たちに劣らず、未来の英雄たちの列が長く、事績が誉れ高きことを、あなたはしかと認識するでしょうから。**八十八**　しかし、未来における真実は入念に隠されているので、わたしは魔術の力だけで解読できないのです、それは定かでなく、疑わしく、暗いものであり、霧が立ちこめた場所で遠くの方にぼんやりと認識される松明のようなものなのです。もし確かなこととして言えることがあるとすれば、それはわたしの言葉が大胆すぎないということです、天の隠し事を隈なく見抜く人物（四十三）から聞いたことをわたしは述べているのですから。**八十九**　聖なる光がこの人物に明かし、かれがわたしに述べたことを、あなたに話しましょう。《いまの時代においても過去の善き時代においても、慈しみ深い天があなたに対して授けたほど多くの輝かしい子孫を――スパルタやカルタージゴやローマのいかなる名高き英雄を想起して比べても劣らぬほど立派な子孫たちを――残した家系は、ギリシャにも蛮地にもラテン世界にもありませんでした。**九十**　しかし、そうした人士たちの中でも》、とその人物は言いました、《わたしはアルフォンソ（四十四）を取り上げましょう、肩書きは二世ですが、徳においては一番の方です、かれは世の中が老いて堕落し、秀でた人間が少ない時代に生まれることになっています。その時代にはかれほど剣や笏の扱いに長けた者も、武具や王冠の重圧に耐える者も現れず、あなたの一族の栄光となり、最高の輝きとなるでしょう。**九十一**　子供の頃から戦を模した荒々しい式典において際立った武勇を発揮し、森や獣たちにとっては恐怖となり、馬上試合では最高の栄誉を勝ち取るでしょう。その後は本当の戦いで勝利し、多くの戦利品を獲得して、頭には月桂樹や樫や芝の輪をたびたび付けるでしょう。**九十二**　成人してからも平和と安定を確立し、若い頃に劣らぬ功績を残すでしょう、強国と境界を接する支配下の諸都市の静穏と安寧を保ち、芸術や学術の振興と発展を促し、高貴な競技や華麗な祝祭を催し、正義の槍で賞と罰を釣り合わせ、危機を予測してそれに備えるでしょう。**九十三**　嗚呼、あらゆる陸地と海を荒らし、乱世の最中きわめて高貴な民に和平の条件を突きつける邪悪な者どもに対して、君主たるアルフォンソが――教会を破壊され、聖域を汚されたことに対する報復として――出撃（四十五）するならば、暴君たる王と悪しき宗派を懲らしめる正義の攻撃はどれほど激しいものとなるでしょうか！**九十四**　トルコが、そしてアフリカが武装した千の軍団を組織して反抗したとしても空しいでしょう、アルフォンソはユーフラテス河や雪に覆われたタウルス山地や灼熱の地にある諸国の先にある土地にまで十字架と白い鳥と金の百合（四十六）を届け、ナイルの大河の知られざる源泉を見つけて黒い額に洗礼を授けるでしょうから。》」**九十五**　翁はこのように語り、その言葉を若者は快く聞いた、これから生まれてくる子孫に想いを馳せ、静かな歓びを胸に感じていた。その間に曙光が射し込んで東の空が明るみ、遠くの天幕の上で旗が靡いているのがすでに見えてきた。**九十六**　賢者は話を続けた、「あなたがたの顔を輝かせている太陽を見てください、その親しき光に照らされた天幕、平原、町、山が見て取れるでしょう。いかなる障害によっても、いかなる攻撃によっても進路を妨害されないよう誰にも知られていない道を通って、わたしはあなたがたをここまで連れてきました。いまやあなたがたは案内者に頼らないで、自分たちだけで進むことができます。これ以上先にわたしが進むことは許

されていないのです。」**九十七**　老魔術師は別れを告げ、騎士たちをその場に下ろすと、来た道を引き返していった。かれらは昇りつつある太陽に向かって歩みを進め、幕営のほうに行った。噂は広まり、三人の威厳のある男たちがようやく戻ってきたことを皆が知った、敬虔なるゴッフレードはかれらを迎えに行くために席から腰を上げた。

第十八歌

リナルドの帰還と贖罪

一　リナルドは自分と会うためにゴッフレードが腰を上げた場所に来ると、話し始めた。「閣下、わたしは自分の名誉をあくまで護ろうとして、命を落とすこととなったかの兵士に報復しようとしました（四十七）。もし、そのことがあなたのお気持ちを損ねたのであれば、やってしまったことは痛恨の極みで、後悔の念がわが心を苛みます。いま、あなたのご指示を受けるためにここに参りました、あらゆる処遇を受け入れます、あなたのお気に召される者になるためであれば。」**二**　謙虚な態度で頭を下げたリナルドの首に手を回して、ゴッフレードは答えた、「苦い記憶はすべて消して、過去のことは水に流そう。償いとしてわたしが求めるのは、あなたがいつものように、立派に務め果たすということだけだ。あなたがしなければならないのは、敵に打撃を与え、わが軍にとって益となるように、森の魔物を征伐するということだ（四十八）。**三**　われわれに攻城車両の資材を提供してきた古い森が、理由は分からないのだが、いまや魔法によって近寄ることの出来ない不気味な森となっている、木を伐採するために誰もそこへ行こうとしないのだが、破壁車を使わないで町を攻略できるとは思われない。今こそあなたは、皆によって恐れられた場所に行って、武勇を発揮するべきなのだ。」**四**　かれがこのように言うと、騎士は危険と労苦を厭わない旨を短い言葉で伝えた、あまり口には出さなかったが、その雄々しい身振りから期待を裏切らないだろうと思われた。他の者たちの友好的な歓待には晴れやかな表情で手を振って応えた。グエルフォやタンクレーディが側らにいて、軍の主要な武将たちもすでに集まっていた。**五**　こうした要職にある者たちと親しく、心からの挨拶を何度も交わした後、階位の低い者たちに静かな笑みを振りまき、気取らない態度で対応した。かれが東方や南方の地で勝利し、飾られた凱旋の山車に乗って進んだとしても、これほど大きな祝福を軍から受けないだろうし、これほど多くの者たちに囲まれることもないだろう。**六**　人々に連れ添われてリナルドは自分の天幕に向かい、天幕の中で親しき仲間たちと輪になって座る、かれらが投げかける沢山の問いに答え、リナルドも戦の状況や森にかけられた魔法について多くの質問をする。だが、各人がリナルドと神々しき隠者に配慮して席を立ったとき、隠者はリナルドに言った、「あなたは長い旅をして、君子よ、その（驚くべき放浪の）途中で、誠に価値ある体験をしました。**七**　世界を支配し給う偉大な王〔神〕に、あなたは何と大きな恩義を負っていることか！その御方はあなたを魔法にかけられた敷居（四十九）から救い出されたのです。迷う子羊であったあなたを今度はご自分の群れに導いて、ご自分の牧舎に入れ給います。そしてブリオーネの声を介して、あなたをご自分の計画の二番目の実行者（五十）に任命し給います。しかし罪に汚れた状態で武器を握り、その御方の貴き事業に関わることはできません、**八**　あなたがそういう状態にあるのは地上と肉の濃霧に覆

われている（五十一）からで、ナイル河やガンジス河や深海の水をもってもあなたを清め、正すことはできません。あなたの汚れをすべて除くことができるのは天の恩寵だけです。ですから天に向かって恭しく赦しを請い、あなたが心の中で罪と思っていることを告白し、涙して、祈るのです。」**九**　このように隠者は言った。かの男は傲慢な怒りと見境のない愛欲（五十二）をまずは心の中で悔い、次に隠者の足下に跪いて、若さに起因して犯した罪を声に出して告白した。天の官吏は罪の赦しを与え、男に言った。「曙の光が射したら、その光に照らされるあの山（五十三）に登って、祈りを捧げるのです。**十**　山を下ったら森の方へ向かいなさい、森には虚ろな悪霊が沢山棲みついています。愚かな過ちに歩みをまたしても妨げられなければ、あなたは魔物や怪物を打ち負かすでしょう（わたしは確信しています）。嗚呼、甘美な歌や嘆きの声を発する妖怪が、優しく微笑みながらあなたに色目を使う美女が、柔らかな媚でもってあなたの心を惑わさないように！欺瞞に満ちた表情や誘惑に乗ってはいけません。」**十一**　隠者がこのように忠告すると、騎士は決意を固めて重要な務めを立派に果たすべく準備する。日中は物思いに耽り、夜になっても考え込み、悲壮な表情をしている。空が曙光に染まる前に見事な甲冑に身を包み、新しいが奇妙な色の外衣（五十四）を羽織る、そして誰にも付き添われず、何も言わないで、徒歩で、仲間たちのもとから離れ、天幕を後にする。**十二**　時刻はまだ夜が天空のすべての領域を朝の光に明け渡していない頃で、東の空は薔薇色に染まり始めていたが、まだいくつかの星の光が空を飾っていた。時を同じくしてリナルドはオリヴェート山に向かって歩み始め、空を見上げて、夜の部分と朝の部分に混在する聖なる不変の美に見とれていた。**十三**　かれは思う、「嗚呼、何と多くの美しい光を天の神殿は宿していることか！昼には太陽神の馬車（五十五）を、夜には金色の光を放つ星々と銀色に輝く月を抱いている。しかし月や星々に魅了される者はいない、われわれの眼を釘付けにするのは薄暗く濁った光であり、それは壊れやすい顔の限られた部分（五十六）に視線や笑みを瞬間的に認めたときに感知される。」**十四**　このようなことを考えながら、最も高い地点に向かって登攀を続ける。そして頂に達すると、恭しく跪いて、高き諸天の彼方に想いを馳せ、東の空を見つめた。「人生の初めの途上でわたしが犯した罪をどうか慈しみ深い眼でご覧になり給え、父なる神よ、そしてわたしの中に宿る古のアダム（五十七）を浄化し、刷新し給え。」**十五**　このようにかれは祈った、かれの前方で昇りつつあった赤みを帯びた太陽はいまや金色を呈し、兜や武具や緑の山頂を金色の光で染めている。かれは心地よい大気が胸や額を優しく打つのを感じ、その微風は美しい曙光の中から生じた水滴の塊をかれの頭上で揺り動かしていた。**十六**　空から降り注ぐ小雨はかれの灰色の外衣を濡らし、その露が一面に広がって外衣の曇りを取り除き、外衣を輝く白で染めていく。その様は萎れた花が朝露を浴びて色褪せた葉を生き返らせ、脱皮した蛇が喜ばしき若さを取り戻し、金色に輝く新しい表皮で自らを飾るかのようである。**十七**　色を変えて純白になった外衣にはかれ自身も驚き、目を見張らせる、それから太古の深い森の方に向かうが、その足の運びは雄々しく自信に満ちている。弱腰の兵士たちが見ただけで怖れ、それより先に進もうとしない（五十八）森の一角にかれはやって来た。だが、森はかれにとって居心地の悪い場所でも、恐怖を覚える場所でもなく、影になった心地よい空間である。

森の魔法を解くリナルド

十八　さらに奥へと入ってまもなくすると、この上なく甘美な音が周囲に鳴り響いているのを聞く。小川から発せられるかすれた嘆き声のような音、木々の葉の間を吹き抜ける風の囁き、美しい声の白鳥の物悲しい歌（五十九）、泣きながら白鳥に答えるナイチンゲールの声、オルガンや竪琴や響きの良い人間の歌声、こうした多くの音が合わさってひとつの音になっている。**十九**　騎士は他の者たちが聞いたような、物凄い轟音が聞こえてくると思っていた、ところが聞こえてきたのはニンフやセイレーンやそよ風や清流や鳥が発する心地よい音色なのだ、驚きのあまり歩みを止め、それから警戒しながらゆっくりと進む。歩みを妨げるものは、さらさらと流れる一筋の川を除くと、道沿いに何も見当たらない。**二十**　美しい川の両方の岸は芳しく見事な花々で飾られ、香気を放ち、輝いている。川は曲がりくねった角を伸ばし、湾曲した部分には広大な森が広がっている、川が優美な花輪となって森を取り囲んでいるだけではなく、森の中に一筋の水脈が入り込んで、森を二つに分けている。水脈は森を湿らせ、森は水脈を影で覆う、両者は水辺と木蔭を交換して良き関係を保っている。**二十一**　騎士が対岸に渡ろうとして川を見つめていると、見よ、驚くべき橋が現れた。金で造られた立派な橋は、強固なアーチに支えられ、幅広の道をかれに提供していた。かれは金色に輝く橋上を進み、かれが対岸に到達するや否や、橋は崩れ落ちる。水が橋を下流へとたちまち運び去り、美しい川の流れは激流と化した。**二十二**　かれは振り返り、水嵩を増した川を見つめる、それは雪が溶けて増水した川のようで、旋回しながら勢いよく流れ、無数のきわめて速い渦を伴っている。だが、リナルドは怪奇な事象に対する探究心（六十）から太古の森へと向かい、ひっそりとした木立の中で新たな驚異にますます引き寄せられていく。**二十三**　かれが進みながら足跡を残すと、そこから芽が出たり、水が噴き出たりするように思われる。あちらでは百合が開花し、こちらでは薔薇のつぼみが開く、こちらで泉が湧くと、あちらでは小川が流れ出る、かれの頭上や周囲に茂る森の古木は、すべて新しい葉をつけるように思われた。樹皮は柔らかくなり、どの植物も緑を濃くし、生気を取り戻す。**二十四**　どの葉にも天の賜物である露が付き、樹皮からは蜜が滴り落ちている、そしてかの楽しげで不可思議な歌や嘆きの調べが再び聞こえてきた。しかし白鳥や風や水の音に和して歌う人間が、どこに隠れているのか分からない。誰が人間の声を発し、楽器がどこにあるのかも分からない。**二十五**　周囲の様子を窺っている間にリナルドは、近くに――感覚が真実と捉えるものを思考は信じないのだが――銀梅花の木があることに気づく、木のほうに向かうが、その木の生えている広い空き地で小道は終わっている。奇妙なことにも銀梅花は大きな枝を張り（六十一）、糸杉や椰子の木を凌ぐほど堂々として、どの樹木よりも沢山の葉を付けている。その場所は森の中心に位置しているようである。**二十六**　戦士はその開けた場所に着くと立ち止まり、さらに新奇な現象を目の当たりにする。子を孕む樫の木が現われ、自力でおのれの幹を割り、内に宿した空洞を開いて、出産する、中からは奇妙な具合に服をまとった大人のニンフが出てくる（何という驚異！）。続いて他の百本の木が、百人のニンフを母体の幹から一斉に生み出すのをかれは見る。**二十七**　演劇や絵画の中にいる森の女

神たち（六十二）――腕を露わにし、裾の短い衣装を付け、高底の靴を履き、髪を解いている、そういうかのじょたち――を見てわれわれは時に感嘆するが、それと同じような出で立ちで、森の木から生まれた偽りの娘たちが姿を現わした。かのじょらが〔森の女神たちと〕異なるのは、弓や箙の代わりに、竪琴、ヴィオラ、リュートなどを持っていることだけである。**二十八**　ニンフたちは踊りや輪舞を舞い始め、自分たちの体で輪を作ると戦士を取り囲んだ、中心点が〔それを中心に据えて描かれた〕おのれの円に囲まれているように。銀梅花の木もかのじょらは取り囲み、かのじょらの甘美な歌声の中に、リナルドは次のような言葉を認めた。「よくぞ来られました、この心地よい秘境へ、わたしたちの婦人の愛であり、希望である方よ。**二十九**　あなたの到着は待ち望まれていました、恋の想いに燃えて、果て、やつれた婦人を慰めるために。この森はこれまで苦悩の暮らしの場に相応しい悼むべき場所でした、見てください、あなたがやって来て森全体が歓喜し、以前よりも軽やかな様相を帯びています。」歌はこうした言葉を含んでいた。そして銀梅花から甘美な調べが流れ出し、その幹が割れる。**三十**　古の時代にはシーレーノスの彫像を開けると驚くべき神像が見られた（六十三）が、銀梅花の大木の開かれた幹の中にはそれよりも美しく、稀有な像が見いだされた。天上の美を偽りの表情の中に余すところなく再現した婦人が現れ出た。リナルドは婦人をしげしげと見て、アルミーダの愛らしい顔（かんばせ）の面影が婦人に認められるように思った。**三十一**　婦人は嬉しさと悲しさが入り交じった表情でかれを見つめる。その視線には多くの感情が入り交じっているようだ。そして言う、「やはりあなたと会うことになった、置き去りにした女のもとに、あなたはやはり最後には戻ってくる。何のために来たの？　わたしの前に現われて、独り寝を余儀なくされ、辛い日々を過ごすわたしを慰めるため？　それとも諍いを起こして、わたしを突き放すため？　男らしい顔を面頬で隠して、武器をちらつかせながら。**三十二**　愛人として来たの、それとも敵として？　敵として来る男に、わたしは立派な橋など用意しなかったわ、小川や花や泉を現出させなかったわ、下生えを刈り、歩みを妨げるものを取り除いて。その甲冑をもう脱いで、顔を見せてください、眼をわたしの眼に向けてください、もし友として来ているのならば。唇を唇に、胸を胸に近づけてください、右手をわたしの右手に差し伸べてください、せめて。」**三十三**　婦人は語り続けた、眼を嘆願するようにくるくると回し、顔色を曇らせ、愛らしくため息をつき、むせび泣き、美しい涙を流す、こうした態度は警戒心を持たずに女に近づく男に――いかに堅固な男であっても――憐れみの情を抱かせるには十分なものだった。しかし騎士は欺瞞を見破っていたので、残忍な男ではなかったが、躊躇することなく、鞘から抜かれた剣を握りしめる。**三十四**　かれは銀梅花の木の方に進む。すると婦人は木の幹に腕を回し、かれの前に立ち憚って、叫ぶ。「嗚呼、わたしの木を切るという暴挙を、あなたは断じて働いてはなりません！剣を置きなさい、無慈悲な男よ、さもなければ不幸なアルミーダの血管を先に剣で突きなさい。この胸を、この心臓を通らずして、その剣はわたしの大切な銀梅花に到達できません。」**三十五**　かれは剣を振り上げ、かのじょの嘆願には応じない。だが、女がおのれの姿を変える（何と奇怪な異形！）、夢の中でひとつの物の形が一瞬にして別の形に変化するように。体の部位が膨らんで、顔が黒ずみ、白や赤みがそこ

から消えた。背丈の高い巨人と化し、武器を手にした百の腕を持つブリアレオース（六十四）のごときである。**三十六**　五十の剣を握り、五十の盾を打ち鳴らし、威嚇しながら体を震わせる。ニンフたちも悉く武器を身につけ、異様な単眼の巨人に変身する。それでもかれは動じることなく、護られた樹木への攻撃を激化させ、樹木はあたかも魂を宿しているかのごとく、斬りつけられると呻く。大気の領域は多くの怪物や異様な現象で満ち、地獄に占領されたようである。**三十七**　暗雲が立ちこめる空でも、地下でも轟音が響く、空では雷が鳴り、土中では地響きがする。風が強まり、激しい嵐となる、リナルドの顔にも突風が吹き付ける。しかし騎士の剣は標的を正確に捉え、かくも異常な状況においても揮われ続ける。胡桃の木が斬りつけられる。銀梅花のように思われた木は胡桃（くるみ）の木（六十五）であることが判明する。このとき魔法が解かれ、魔物たちは姿を消す。**三十八**　穏やかな空が戻ってきて、風は止み、森は自然の状態を回復した。魔術に冒された恐ろしい空間ではなくなったが、森が陰鬱であることに変わりはなく、そこは影に包まれ、そもそも不気味な場所である。勝利した男は森の伐採を阻もうとする勢力が一掃されたことを確認しようとする。そして笑みを浮かべて、つぶやく。「おお、虚ろな影どもよ！おまえたちの魔力に屈して立ち止まる者は愚か！」。

註

（一）原作はトルクワァート・タッソ著 *Gerusalemme liberata*（一五八一年）。翻訳はカレッティの校訂に基づく次の版を底本とする。*Gerusalemme liberata*, a cura di Franco Tomasi, 2009, Rizzoli. 訳文中の〔　〕は筆者による補足説明。

（二）（　）は原文に付いているもの。

（三）イスラム教徒がエジプトをビザンティン帝国から奪ったのは七世紀半ばである。「ひとりの戦士」とはいずれかの時代にエジプトで君臨したマホメットの子孫を指す。

（四）エジプト王で、カリフを称するアブル・カッセムを指す。

（五）紀元前四世紀のギリシャ人画家。

（六）紀元前五世紀のギリシャ人彫刻家。

（七）伝説上の不死鳥。五百年の長寿を保つが、香木で作った巣の中で死に、自分の灰から再生する。

（八）アルタモーロは古都サマルカンドの王で、第二十歌でキリスト教軍と戦う。

（九）歴史上のアルメニア人。三十八節でエジプト軍の司令官に任命される。

（十）ダマスカス王、アルミーダの叔父でもある。

（十一）アルミーダは誘惑したキリスト教軍の兵士たちを自分の館に連れ込んで、魚に変身させた（第十歌六十一―六十七節）。

（十二）アルミーダは前註の兵士たちを再び人間の姿にして、エジプト王に献上しようとしたが、兵士たちは移動の途中でリナルドによって解放された（第十歌七十一節）。

（十三）「幸福の島」の海岸（第十六歌六十二を参照）。

（十四）運命の婦人を指す。

（十五）リナルド、カルロ、ウバルドの三人。

（十六）『アエネーイス』第八歌六二六―六二八を参照（イタリアの歴史とローマの戦勝が描かれた盾を女神ウェヌスが息子のアエネーアスに贈る場面。）

（十七）第十五歌二節で二兵士が別れたアスカロンの老魔術師。

（十八）第十六歌二十九節以下でリナルドをアルミーダの園から救出したこと。

（十九）第十四歌六十二節以下を参照。

隠者ピエートロを指す。

（二十）怒りに駆られて仲間のジェルナンドを殺したこと（第五歌）と、アルミーダの園で戯れに耽ったこと（第十六歌）を指す。

（二十一）エステ家の歴史に言及する語りは、ボイアルド『恋するオルランド』第二十一歌と第二十五歌、アリオスト『狂乱のオルランド』第三歌にも見られる。これら両詩人もタッソ同様にエステ家に仕えた。タッソはおもにジョヴァン・バッティスタ・ビッニャ『エステ家君主たちの歴史』（一五七〇年刊）に基づいて語っている。

（二十二）ピッニャは前註に挙げた自著の中で、エステ家の起源を五世紀初めに西ローマ帝国に生きたカーイオ・アッツィオとする。

（二十三）前註で挙げたカーイオ・アッツィオ。一族の者や周囲の者を組織してゴート族に対抗した。

（二十四）二回にわたってイタリアに侵入したゴート族。

（二十五）西ローマ帝国皇帝ホノリウス・フラヴィウス（在位三九三―四二三年）。

（二十六）カーイオ・アッツィオを継いで、エステ家の当主を務めた。

（二十七）四二八年からエステ家当主。

（二十八）四五二年にイタリアに進入したフン族のアッティラ。

（二十九）フォレストはアクイレイアの町をフン族の侵攻から守ろうとしたが、その過程で戦死した。トロイア防衛の英雄ヘクトールと重ね合わされている。

（三十）四五三年にエステ家当主となった。

（三十一）フェッラーラの町を指す。

（三十二）オドアケルは五世紀のローマ帝国軍人。アカリーノは兄弟のアルフォリジオとともにオドアケルと戦い、殺された。

（三十三）古代ギリシャ・テーバイの政治家・名将。敵の矢を受けて瀕死の傷を負ったが、自軍の勝利と自分の盾の無事を確認するまでは体に刺さった矢を抜こうとせず、勝利の報告を受けると矢を抜いて死んだ。

（三十四）フランス王、初代の神聖ローマ帝国皇帝（八一四年没）。イタリア遠征を度々実施し、ロンゴバルド王国を征服した。

（三十五）フェッラーラのこと。

（三十六）カノッサのマティルデ（一〇四六―一一一五）。

（三十七）唯一の相続者として広大な領土を相続し、女でありながら高い能力をもって支配したこと。

（三十八）神聖ローマ皇帝ハインリッヒ四世。聖職叙任権をめぐって教皇グレゴリオ七世と対立し、教皇に破門された。

（三十九）本作品におけるキリスト教軍の武将グエルフォ。ドイツにおけるエステ家の創始者。

（四十）イタリアにおけるエステ家の創始者となった人物。作品中でリナルドはベルトルドの子とされる。

（四十一）第八歌で語られたズヴェーノを指す。

（四十二）第八歌三十八節を参照。リナルドはズヴェーノの仇であるソリマーノをこの剣で殺さないといけない。

（四十三）未来における真実を言うことができるのは神の恩寵を受けている隠者ピエートロである。

（四十四）本作品を著者が捧げたフェッラーラ侯爵。第一歌四節を参照。

（四十五）第一歌五節を参照。

（四十六）エステ家の紋章には白い鷲と金色の百合があしらわれている。

（四十七）内輪もめの相手ジェルナンドを殺したこと（第五歌三十一節以下）。

（四十八）森の魔法を解くことができるのはリナルドだけである（第十四歌十四節）。

（四十九）アルミーダの園からリナルドを救ったこと（第十六歌）。

（五十）第十四歌十三節を参照。

（五十一）地上の濃霧は傲慢や怒りを、肉の濃霧は情欲を暗示する。

（五十二）傲慢と怒りはジェルナンドの殺害を、愛欲はアルミーダとの戯れを引き起こした。

（五十三）エルサレムの東に聳えるオリヴェート山。罪の認識と罪の告白によりリナルドは赦しを得たが、さらに贖罪行為として聖山に昇って祈らないといけない。

（五十四）外衣は灰色をしている。甲冑については第十七歌五十八節を参照。

（五十五）第七歌三節を参照。

（五十六）女性の目元や口元を指す。

（五十七）「私はアダムより伝わる肉体をまとっていた」（『神曲』煉獄篇第十一歌十―十一）

（五十八）第十三歌十七節以下を参照。

（五十九）白鳥は死ぬ直前に美しく歌うとされる。

（六十）第十四歌五十八節でもリナルドは未知の驚異を見ようとし、結果的にその行動がアルミーダの罠に落ちる遠因となった。

（六十一）銀梅花は愛の女神ヴィーナスに関係する灌木で、大きな枝を張ることはない。

（六十二）十六世紀に人気を博した牧歌劇には狩猟の女神ディアーナに従うニンフたちがしばしば登場する。第十四歌六十一節を参照。

（六十三）シーレーノスは野に住む半獣神で、その名を冠した小さな木製の彫像が古代には街道に置かれ、彫像の内部には美しい神像が隠されていたとされる。

（六十四）五十の頭と百の手を持つ神話上の巨人。

（六十五）魔女たちが用いる木とされる。

執筆者

水野　留規（音楽学部教養教育　教授）